

<講座名>

瞬きの間にみえる世界 — 英米文学における妖精詩への誘い

<所属名・氏名>

言語センター・高橋 優季

講義内容

ディズニー映画や『ハリー・ポッター』シリーズもしくは『ファンタスティック・ビースト』にいたるまで、魔法の世界の住人たちは、21世紀を迎えテクノロジーの進化が止まるところを知らない現代においてもなお私達を魅了し続けています。そうした超自然の存在がどのように創られ、私達の想像のなかで生き続けてきたのかを、19世紀後半の文学の世界に辿ってみます。

メッセージ

みなさんは、小さな子供だった頃から今まで、どのような絵本や小説、物語を読んで過ごしてきましたか？例えば、額に雷型の傷をつけた少年ハリー・ポッターが悪の魔法使いと決闘するお話や、「ホビット」と称する小人のような種族が遙か遠い昔に地球儀に記されることのない国で繰り広げた大冒険に夢中になったことはありませんか？このような、いわゆる「児童文学」または「ファンタジー文学」といった文学ジャンルのなかで多種多様な姿で描かれ登場する妖精たちは、19世紀後半のイギリスにおいて多くの詩や小説のモチーフとなりました。本講義では、その起源に遡って、当時の文学テキストをもとに妖精の世界をのぞいてみたいと思います。

プロフィール

2017年3月 青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程修了。都内私立大学の非常勤講師として勤務後 2018年9月に本学言語センター着任。

参考図書

Richard Finneran, ed., *The Collected Poems of W.B. Yeats*. London: Scribner, 1996.

井村君江 『妖精の国』（東京：新書館、2000年）

『妖精の国の扉－フェアリーランドへ導く九つの鍵』（東京：大和